

4. 結び

第295次調査で得た知見としては、(1) 大極殿の北面西階段・西面階段を含めた基壇西北部を検出し、基壇の規模を確定したこと、(2) 西面築地回廊を推定心より西に約60cmずれて検出し、あわせて東雨落溝、および創建当初のバラス敷きも検出したこと、(3) E・F期の西脇殿の様相が把握できたことの3点が挙げられる。

(1)は二重基壇で南面中央階段を3基から幅38尺の中央階段1基とするなど、階段部分を含めた基壇形状の復原に少なからず影響を及ぼした。(2)に関して、第192・296次調査では東面築地回廊からの推定位置どおりに検出したのに対し、北の第217次調査では多少西に振れる。したがって、さらに北の第295次調査で大きく西に振れたと考えられなくもない。しかし一方で、第295次西区南半で検出した幅の広いA～D期の東雨落溝を第217次調査区では検出していない。以上のことから、この溝が第295次調査区と第217次調査区の間で築地回廊を横断し、その南北と築地心がずれる可能性が出てきた。これらの問題解明は今後の調査結果を待ちたい。

また、大極殿から回廊・磚積擁壁までの敷地造成に関して、E・F期にはSB17870とSB17874の間に段差があることが推測できたが、これが大極殿創建当初までさかのぼって存在したかは現時点ではわからない。この問題も、敷地全体を復原する上で、今後の調査を踏まえてさらに検討を加えねばならないであろう。

一方、第296次調査で得た知見は、(1)築地回廊西南隅の基壇や一部の礎石の位置を明らかにしたこと、(2)大極殿院内の水を排出するための暗渠などの施設を明らかにしたこと、(3)大極殿広場の小礫敷を良好な状態で検出したことなどである。(1)(2)では大極殿院南面の東西対称性や、従来の時期区分の妥当性を再確認することができたが、築地回廊の復原に対して他の調査区との結果を踏まえたさらなる検討の必要性も指摘した。また、(1)(3)についても、将来の大極殿院全体の敷地造成や復原を考える上で、地盤高を含めた重要な情報を提供した。

以上のように、今回の調査で、第一次大極殿はもちろん、第一次大極殿院地区における奈良時代、平安時代初期の遺構や敷地造成を把握する上で、重要な資料と問題を提示できたと考える。

(蓮沼・古尾谷)

平 城 専 こらむ 欄 ①

◆ことしの現場班

3人が転出、新たに4人がメンバーとなりました。班の顔ぶれも変わり、刺激の強い？現場が多かったようです。

春は、早速新人が研修に登場。真の新人I氏は黙々と、新人というにはためらいもある(失礼)T氏は持ち前のバイタリティを発揮、他調査員を圧倒してバリバリと調査を切り盛りしました(本人は大分遠慮したそうですが…)。

夏はH氏が研究所初の女性総担当者で登場。現場や遺物整理の作業員のみなさんに心配されつつも、研修から連続参加のI氏を堂々従え、長い調査を乗り切りました。

秋は食欲の秋にふさわしく、現場近くの食堂で、一食千円以内でいかに質・量共に優れた好きな料理？を食べるか競われ、一部調査員の間で話題となりました。このコスト感覚が今後研究や生活にいかされるのでしょうか？

冬は中規模現場の連続。調査員が分散し、休憩時間恒例トランプもあまりできなかったようです。整理棟の横なので時々自主参加していた人間もみましたが…(私です)。

景気よく出た昨年に比べ、木簡の出土が皆無で、少し寂しい一年でした。ここでも不況ですか？ (K)

考古第1 井上 和人
考古第2 金田 明大
考古第3 清野 孝之
遺 構 浅川 滋男
計測修景 平澤 毅
史 料 渡邊 晃宏

次山 淳
高橋 克壽
山崎 信二
西山 和宏
高妻 洋成
古尾谷知浩

夏
石橋 茂登
川越 俊一
岩永 省三
蓮沼麻衣子
内田 和伸
舘野 和己

冬
加藤 真二
玉田 芳英
千田 剛道
箱崎 和久
高瀬 要一
山下信一郎

色付きは総担当者